

春雨はとぎれとぎれにあきらかに
うしろの森が近づいている

藤ほたる（神奈川県）

「森」が眼前ではなく「うしろ」にあるところに、太古につながる森がイメージされました。
「春雨」によって気配が濃くなり、生き物めいた生々しさを帯びてくる森。このまま少しずつ自然に溶け込んでゆくかのような身体感覚にも惹かれます。

王冠にはねた泥が
王様を優しくしました

氷丸（茨城県）

“完璧な美”を頭に載せているのは、この「王様」にとっては荷の重いことだったのでしょう。
自分も完璧であらねばならず、人にもそれを求めてしまう。通常は歓迎されないアクシデントのような事柄でも平穏をもたらすこともあるのかと思うと、気持ちがふっくらしてきます。

唐突に詩のなりかけが降ってきて
サランラップをつよくちぎった

からすまゐ（神奈川県）

詩の生まれる劇的な瞬間。その衝撃が伺えます。同じ作者には「積雪になりゆくさまの一切を／見ていた人のたましいの崖」「わたくしの好きなおとこが／泣きながらツムツムをする／透明な夜」「台所に座り込みたる母よ母／死火山みたいに微笑まないで」「全世界の放置自転車を一尾ずつ／こたつに招いて話を聞きたい」「ささくれをまくれば続く物語／わたしの夜に延長線を」などの作品があり、印象的な一場面や激しい言葉による劇化、「物語」の希求を通して、世界や生きるということの成り立ちを浮かび上がらせようとしているように感じられました。

黒髪が
風にたなびき
五線譜になる

桜咲（千葉県）

五月の投稿作品ということで、おのずと五月に吹くさわやかな「風」が想起されました。透明感のある空気のなか、つややかな「黒髪」が輝いている。この「五線譜」にはこれからどんな音符が書き込まれるのだろう。五感がくすぐられる一篇です。

一頭の蛾に渡された鱗粉量

田崎森太（東京都）

「一頭の蛾」の「鱗粉量」に思いを馳せたことは今までありませんでした。ほんのわずか、でも確かに“量”として存在していて、生きてゆくのに大事な役目を果たす鱗粉。「渡された」に、その量によって命の長さが決められているように響いてきました。同じ作者による「若葉風明日を目指さぬ蝸牛」「噴水の水涸れて知る昼の闇」「罌粟散って無音の闇を驚掴み」「父葬りまた行き過ぎる蟻の列」などの作品にも“生と死”の気配が満ちています。

ため息は深い新緑取り込んで

鈴木 勝也（京都府）

「ため息」をつくにもまずは息を深く吸い込まなければならない。息を吸うこと、生きることを身体はいつも求めている。取り込んだ「新緑」は、心を少し軽くしてくれそうです。

丑三つの

境界領域

紙とペン

スズキセーホン（千葉県）

「丑三つ」の真夜中、「紙とペン」さえあれば「境界」を超えてゆくことができる。

仏手柑の花へ水脈なだれ込む

奎いう子（佐賀県）

薄紫の蕾に白い花と水の透明が美しい。水をたっぷり含みいちだんと濃くなる花の香。仏手柑の花期は五月～六月。命の勢いが目に鮮やかな初夏。作者のまなざしは視覚を超えて、花の内部にまで及んでいます。また、仏手柑の果実の黄色や独特のかたちも思い起され、生き生きとした生命力が伝わってきます。

時刻表の三十分の空きを見て
君と話すとした夜です

小林紅石（埼玉県）

「君と話す」には確固たる決意があるのだ。乗車予定の電車が来るまで、「三十分の空き」ができた。いま君に電話をしたら迷惑だろうか…十分なら諦めた…三十分というこの空き時間はきっとキューピッドが後押ししてくれているに違いない…。はじまったばかりの恋だろうか。みずみずしい逡巡。

寝室に澱むことばを掬う夜
水たまりの落ち葉の感触

高橋ちひろ（宮城県）

「澱む」とあるので、届くことの叶わなかった「ことば」、あるいは自分のなかで堂々巡りしている「ことば」なのかもしれません。「ことば」は“言の葉”。その「感触」が泥にまみれ湿っている「落ち葉」としてくっきりと伝わってくるところと、「掬う」という行為のやすらかさに惹かれました。

晩春のきみのネイルのきらりりり
死骸になれば眼はうごかない

松下 誠一（東京都）

当たり前のことだけれど、「死骸になれば眼は」決して「うごか」ず、光を感じることもない。それなのに、施した「ネイル」は生きているときと変わらずに「きらりりり」と光を放つということがふいに恐ろしくなりました。「死骸」という即物的な言い回しも恐ろしさを増幅させます。

月のため紙のボートを漕いでいく

im（沖縄県）

「月」に近づくためにささやかなボートで銀河を進んでゆく。「紙のボートを漕いでいく」とは、紙に詩を書くことなのかも。

スパッと切れた。白昼のうたた

水木貴奈子（神奈川県）

“うたた寝”から、はっと目が覚めたのでしょう。うたた寝の“寝”が文字通り「スパッと切れ」
ていて面白いです。

障子貼る空を浄めるように貼る

藤 雪陽（長野県）

貼り上げた障子の清々しさが伝わってきました。「空を浄めるよう」な丁寧な手つきで真新しい障子を貼ってゆくにつれ、貼っている人の心も浄められてゆくのだと思います。

階段を一段上る

明日もたぶん一段上る

きっと、泉にも着く

少し水を飲む

玄関（神奈川県）

「たぶん」「きっと」の語が、生きてゆく道のりとは常に不確かであることを思い起こさせます。そして平らな道ではなく「階段」を「上る」ところに、その道のりが気力と体力を要するものであるとともに、「明日」を信じる気持ちも伺えます。階段の先に「きっと」ある「泉」を目指して、階段を上ってゆく。「少し」だけ喉を潤したら、また次の泉に向かって一段ずつ階段を上ってゆく。「たぶん」明日も明後日も。

他にも心に残る作品がたくさんありました。

次回も楽しみにしています。